



愛隣幼稚園.....

園だより

.....20.11月

## 仲間は仲良し？

本格的な保育が始まり、2ヶ月が経過しました。9月、初日から全園児が登園し間もなくお弁当も始まりしました。長い時間過ごすようになり、子どもたちが夢中になって遊びこんでいる姿を幼稚園中に見るようになりました。幼稚園のあちこちからエネルギーが沸々と湧いてきている、そんな感じがし始めると、子どもたちがクラス間を行き交います。運動会を機に幼稚園中の子どもたちが、そこそこ顔見知りになりました。日常の園生活を通して、また運動会への活動を通して（特に年長のリレーは毎日のようにばらやたんぼぼも応援しました。）子どもたちが出会っていききました。なかでも、運動会当日の野外劇に集約されていく子どもたちの“あそび”には、皆が顔見知りになっていく機会が多くありました。誰がどこで遊んでもいい愛隣です。たんぼぼだってばらや、てんとうむしに出かけて行きます。出かけた先で、皆が夢中になっているあそびにちょっとずつでも参加させてもらったら、そこで出会った人は少なくとも顔見知りです。今年は「つながるとびら」も常時設置の状態で遊んでいましたから、絵本が出来上がった時には、幼稚園中の子どもたちが自分たちの“あそび”としてそれを共有しましたし、そこに登場する人々は顔見知りの〇〇君や〇〇ちゃんでした。ですから、おそらくご家庭の皆さんが想像する以上に、子どもたちは野外劇を楽しんでいたと思います。だって晴れの舞台と一緒に演じているのは、自分と自分が知っている〇〇ちゃんや〇〇君たちですから。こんな風にして、子どもたちは幼稚園の人たちを＜仲間＞と感じ始め、より近い存在になっていきます。こう書いていくと読者の皆さんは、＜仲間＞＝＜仲良し＞というイメージももたれるのではないかと思います。事はそんなに単純ではありません。そもそも＜仲良し＞というのが少々胡散臭い。これは親（大人）が勝手に子どもに願って創り出す＜仲間イメージ＞（私固有の感じ方かもしれませんが）ではないかと考えます。＜仲間＞になることはそんなにきれいごとではありません。それが証拠に、顔見知りになり近い存在になってきた子どもたち（特に同じクラスの）は結構、辛辣なやり取りもし始めています。近くなったので遠慮がなくなってきたように感じます。そんな子ども達の姿を見ながら、伊武雅刀が歌手として1983年に出した「子ども達を責めないで」という歌を思い出します。（※この歌は歌詞全体が読まれないと真意が伝わらないので、ご存知ない方は是非、検索して読んでください。）～子どもは幼稚で 礼儀知らずで 気分屋で 前向きな姿勢と 無いものねだり 心変わりと 出来心で生きている 甘やかすとつけあがり 放ったらかすと悪のりする はっきり口に出して人を はやしたてる無神経さ 好きなものしか食べたがらない 泣けばすむと思っているところがズルイ 逃げ足が速く いつも強いものにつく・・・～（歌詞から一部抜粋しています。）とんでもない言葉が並んでいますが、私はニヤッとしてしまいます。我が子に思い当たる節はありませんか？ そう、子どもって結構真正直に、誰にも何にも忖度せずに感じたまま、思うがままに発言したり行動したりするものです。はっきり言うと、それが子どもです！嘘もつけば隠し事もします。意地悪もすれば仲間外れもするのです。それで、悲しい思いをしたり、巡り巡って自分が嫌な思いをしたり、叱られたり……。初めから他者との関係をうまく調整して仲良く生きている子どもはいません。真正直によってもたらされた結果に直面して、自分らしくありながら他者との関係を調整するやり方を見つけていくのです。その途中、親は子ども同士の辛辣なやり取りを目の当たりにし平静ではいられなくなったりします。でも、あなたが意地悪なのではないし、あなたが悔しいわけでもありません。冷静に子ども自身が自分の力でこの局面を乗り越えるために、親としてあなたができることを考えましょう。時に子どもたちの中に入って調整をすることも必要ですが、そんなことができるのは幼児の時代に限られます。思っているより早く直接的な親の出番はなくなります。では、そんな親にできることは何でしょう。それは親として子どもに伝えておきたいメッセージを親自身がもつこと、それを折にふれて子どもに伝えることです。“差別や排除をしないこと”（本当の意味で）正直であること”“仲間を信じること”“人を傷つけないこと。自分も傷つけないこと。身体も心も”・・・あなたは我が子にどんな人になることを願っていますか。親としてこれだけは伝えたいと願うものを、あなた自身が確認しておくことも子育てには重要なことです。